

サートが開催された。体にしみ込むような素晴らしい音色に、たいへん癒された。次回(15回)の本シンポジウムは、2009年7月にオーストリアのウィーンで開催される。いい研究結果を出して、またこのシンポジウムに参加してみ

たい。

最後になりましたが、本シンポジウム参加の機会を与えていただき、ご援助いただきました(財)農芸化学研究奨励会に厚く御礼申し上げます。

第10回アジア栄養学会議に出席して

鹿児島大学農学部獣医学科 叶内宏明

第10回アジア栄養学会議が2007年9月9日から13日までの5日間、台湾・台北市の台北国際会議場(TICC)で開催された。TICCは2007年現在、世界で最も高いビルである台北101に隣接していた。本会議は1971年にインド・Hyderabadにおいて第1回が催され、現在では4年に一度の開催となっている。同様の会議では国際栄養学会議があるがこちらも4年おきの開催であり、アジア栄養学会議はその狭間に開催されている。本会の目的は栄養科学に関連する人々の結束の助け、アジアの人々の健康に寄与するアイデア交換の機会を提供することにある。近年、アジアの栄養学者は貧困に伴う成長期の栄養問題と生活習慣病という両極の問題に直面している。困難な問題であるが未来のために改善の努力が必要であり、アジア以外の研究者の参加も呼びかけられていた。

会議初日はwelcome receptionがTICC内で開催された。ノンアルコールの会であったが閉会まで多くの参加者が残っており活気にあふれていた。会議2日目から5日目までの会期中に5件のPlenary Lecture、21件のSymposia、6件のWorkshopで合計147演題が登録されていた。ポスターは493演題が登録されていた。その内容を大きく区分するとエネルギー代謝、ビタミンおよびミネラ



写真2

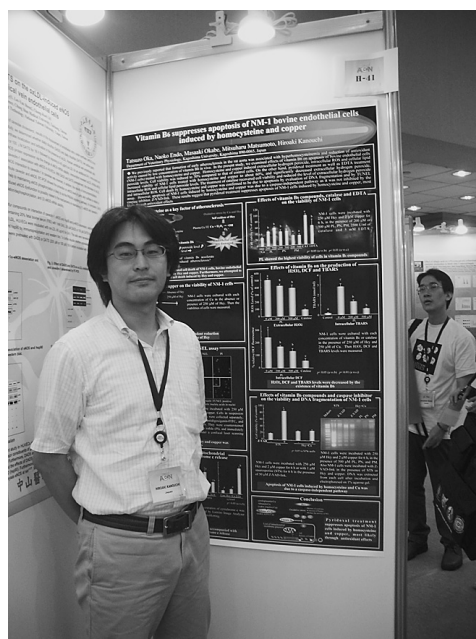


写真3



写真1

ル、栄養疫学、栄養教育、食品性生理活性物質および機能性食品、生活習慣病、肥満と体重コントロール、栄養と運動、栄養と免疫、臨床栄養、栄養と食品加工となっていた。大半の演題は食品性生理活性物質および機能性食品であった。立ち見が出ていたシンポジウムの一つである「New Frontier of Amino Acid Science」では、幼児期のアミノ酸要求量が現在の基準とされる量では不充分である可能性

を示すデータや、アミノ酸が体温の恒常性に必須な成分の一つであることを示すデータ、神経細胞はL-セリン合成に関わる酵素の発現がなく生存のためには周囲の細胞からL-セリンが供給される必要があることなど、最先端のアミノ酸研究が紹介されて活発なディスカッションが行われた。

今回の会議には学生5名を帯同して5つの演題を発表した。

「T. Oka, N. Endo, M. Okabe, M. Matsumoto, H. Kanouchi, Vitamin B₆ suppresses apoptosis of NM-1 bovine endothelial cells induced by homocysteine and copper」

「H. Kanouchi, M. Okabe, M. Matsumoto, T. Oka, Vitamin B₆ suppresses NFκB activation induced by lipopolysaccharide in RAW264.7 cells」

「M. Masuda, A. Fukuda, H. Kanouchi, T. Oka, Vitamin B₆ induces cell death in breast cancer」

「S. Seshimo, H. Kanouchi, T. Oka, Plasma homocysteine as a risk factor for neurodegeneration disease」

「H. Yoshimasa, M. Okabe, M. Matsumoto, H. Kanouchi, T. Oka, Copper-induced toxic effect on cell proliferation」

ビタミンB₆はアミノ基転移反応、脱炭酸反応に関わる酵素の補酵素である。近年、ビタミンB₆の新たな生理機能が明らかにされつつある。高ホモシステイン血症は血管内皮細胞に酸化ストレスを介して障害を及ぼし、動脈硬化

につながる。ビタミンB₆は効酸化活性を有しており、ホモシステインによる酸化ストレスを抑制することによって動脈硬化発症を予防する効果を持つことを発表した。また、5 mMと高濃度のビタミンB₆投与はin vivo, in vitroともにガン細胞の増殖を抑制する。増殖抑制メカニズムを明らかにするために、ビタミンB₆投与によって変動する遺伝子のスクリーニングをDNAマイクロアレイで行った。Annexin A 1やInsulin-like growth factor binding proteinなど複数の遺伝子を明らかにして、それら遺伝子の発現パターンを詳細に発表した。ビタミンB₆がNFκBに関連する免疫系に関与することが指摘されていたが、ビタミンB₆がNFκBの転写活性化能を直接抑制して炎症につながるタンパク質の発現誘導を抑制することを報告した。これら発表には国内外の研究者の関心も高く、臨床応用への可能性などについて討論した。一方、アルツハイマー等の神経変性疾患発症機構に関する基礎研究において、ホモシステインによる神経細胞死誘導は神経細胞を取り囲む神経膠細胞と共存により増強されること、また銅イオン由来の酸化ストレスに対して神経細胞は体細胞よりも耐性が高いことを報告した。今回の会議では栄養学研究者の参加が多いためか、これらの演題に関しては特に興味を持ってくれる研究者は残念ながら少なかった。

最後になりましたが、今回のアジア栄養学会議参加にあたり、助成を賜りました財団法人農芸化学会研究奨励会に深く感謝し、御礼申し上げます。

第10回アジア転写会議に参加して

近畿大学工学部 仲宗根 薫

アジア転写会議 (ACT; Asian-Pacific Conference on Transcription) は、アジアの分子生物学の研究者の交流とレベルアップを目標として「転写」をキーワードとして、1990年から隔年で開かれている、参加者100~150名程度の国際会議です。当初、日本、韓国、台湾、インド4カ国でスタートしましたが、すぐオーストラリアと中国に拡大、現在では、タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポールを加えた10カ国の代表からなる国際委員会で運営され、既に8カ国で開催され、のべ参加人数は1,000人を超えるに至りました。ACTのモットーは、「研究者の人間としての交流と次世代アジア科学のサポート」で、会議をきっかけとして多くの共同研究が生み出されています。この会議は、これまで欧米の国際会議に参加する機会を与えられないアジア諸国の若い世代の研究者に、また母国で国



写真1 発表会場のひとつ；外はインドでも中の様子は普通です。

際水準の内容をもつ国際会議に参加する機会を提供してきました。毎回、USAとEUから代表的研究者を招聘してきたのもこの理由です。初期にはアジア間での学問的ギャッ